

# 「無言館」を訪ねて

14期 <sup>ますの たか</sup>増野 喬



7月に長野県上田市の戦没画学生慰霊美術館「無言館」を訪れた。無言館は塩田市と呼ばれる浅間山を望む、丘の上に建てられている。ヨーロッパの僧院を思わせるコン

クリート打放しのシンプルなデザインで、上空から見ると十字架の形をしている。

中に入ると教会のようで戦没画学生の絵を飾るにふさわしい造りになっている。美術館には太平洋戦争で志半ばで戦没した画学生三十余名、三百余点の遺作、遺品がてんじされている。

館主の窪島誠一郎氏（父親は作家の水上勉）が、美術学校の仲間を戦争で失った画家・野見山晁治と共に、日本各地の遺族を訪ね、平成七年から二年間にかけて遺作、遺品を蒐めたものである。窪島は野見山の亡き画友への鎮魂録「祈りの画集」に打たれ、無言館の建設を思い立った。窪島の父母の背後にあった戦争を一顧だにしなかった反省から、戦没画学生の遺作を蒐めることになった。

絵は画学生の父母、妻と子供、姉妹などが多い。百号を超える作品もあり、絵の中には将来大きな画家になることを予感されるものもあった。作成半ばの妻のヌードもあり、必ず生きて帰り、残りを描き上げると約束したが願いは叶わなかった。

館内の中央にはガラスのショーケースが置かれ、使い込んだ絵筆、スケッチブック、パレット、などと共に戦地からの便りもあった。肉親への氣遣いや、子供からのカナ雑じりの手紙、そして生きて帰り絵を描きたい、と強い思いが記されたものもある。

館内は灯りを抑えた中で、作品や遺品を観て



いる人達は、口数少なく、涙を抑えきれない若い人もいた。絵には出身地、出身美学校、戦死した年月、そして戦死した年齢が記されている。享年二十歳から三十歳前後、戦死した年月には、昭和二十年七月、終戦のわずか一ヶ月前に亡くなった人もいた。戦争は彼等の未来と才能を奪ってしまった。

太平洋戦争では民間人も含めて約四百万人の人達が亡くなっている。戦争は多くの人々に犠牲を強いた。ひるがえって、今私達は絵を自由に描け、作品を制作出来る。なんと喜ばしい事か。戦争を知らない人が増え、戦争に加担する動きがちらほらと見える昨今の風潮を憂う。今に生きる私達が、自由に描け、存分に表現出来る喜びを大切にすべき、と無言館は教えてくれている。戦没画学生達の遺作品に触れ、平和の有り難さを感じた旅でした。

平成二十二年七月二十八日



「東京北辰会だより」4号より転載